第6章　授業モデルケーススタディ：卒業研究論文指導

矢　野　直　明[1]

いきなりだけれど，私が卒業研究生に配布している「卒業研究の栞」の中のエピソードから始めよう。以下の通りである。

大学で私がアガシ教授の研究室の机につくと，教授は小さな魚を持ってきて目の前のブリキ皿に置き，「これを調べてください。しかし，私がよいと言うまでは，これについてだれかに相談したり，魚に関する本を見たりしてはいけません」と言った。1時間もそれを見ていると，私はこの魚を十分に理解したと思ったが，教授はそばにいながら私に目もくれなかった。そして1日がたち，1週間がたった。鱗の形やその鱗が列をなしている状態，あるいは，歯の形や配列などを興味深く観察していると，私はこの標本について十分調べたと思った。それが伝わったのか，教授は7日目にようやく，私の机の隣に座り，「さて，どうかね」と尋ねた。

私は堰をきったように，観察したことを1時間も話した。それを聞いて教授は「それは違う」と言いながら，くるっと向きを変えて立ち去った。私は最初のノートを捨てて，さらに1日10時間，1週間ほど観察した結果，私自身が驚くような結果を得た。彼はようやく満足し，今度は4リットルほどの骨を私の前に置き，何の指示も与えず，「これが何か調べなさい」と言った。私は2カ月以上もこの作業に取り組んだ。そのあいだ教授は，何の助言も与えてくれず，来ると決まって「それは違う」と言った。

この作業が終わると，今度はアルコール標本を与えられた。カレイ科に属する20種類ほどの魚に思われた。作業をはじめたとき，私は自分にモノを扱う力がついていることを実感した。分類学の基本となる，モノを比較する技術を私は学んだのだ。この段階では，作業について活字を読むことも他人と議論することも許された。私は魚類学の文献について多くの知識を身につけた。

櫛鱗魚類と硬鱗魚類の区別というアガシ教授の分類体系に従って作業を進めていくと，意外なことに，調べていたカレイのなかに，一方は円鱗だが，もう一方が櫛鱗になっているものがいた。アガシ教授の分類体系に対する疑念が生まれ，わが師の学識に対する信頼もゆらいだが，一方で，この発見を彼に言うことに意地悪な喜びも感じ

1　IT 総合学部教授

た。私は分類しかねるこの魚をどう分類すべきかと質問した。そのとき彼は，「やったね，君。これを知っているのは君と僕の２人だけだよ」と答えた。この一件で，私の見習い期間は終わった。それからのアガシ教授は，驚くほどよく私と話すようになった。

これは，ルイスB.バーンズ他編著『ケース・メソッド教授法』（高木晴夫訳，ダイヤモンド社，2010年）の中で紹介されている話である。

教えるということの一つの理想的な姿がここにあるが，それは，研究室に毎日通って，教授とコミュニケーションする（あるいはしない）という体面的な接触によって成り立っている。

教えずに自分の頭で考えさせる，というのは，教えなくてもそばにいて，学生を見ていなければできない。あるいは学生の行動を拘束しなければ無理である。Eラーニングにおいてこのような教育法をとることは難しい。

そのEラーニングのハンディを何とか克服する，あるいは他のメリットによって置き換えたいというのが私たちの工夫である。もっとも本稿の対象は卒業研究で，Eラーニング全体については他の論考に譲りたい。

卒業研究のテーマは「サイバーリテラシー各論」である。私が提唱するデジタル情報社会のリテラシー＝サイバーリテラシーを学んだ学生たちが，その考えをもとに現代社会のあらゆるジャンルの事象，事件事故を取り上げている。言ってみれば人文科学系の研究で，サイバー大学の主要科目であるプログラム作成，セキュリティ対策といった技術系，あるいはIT起業論やプロジェクト・マネジメントなどのビジネス系とは少し勝手が違うだろう。その点，あらかじめお断りしておきたい。

スケジュール

年間のだいたいのスケジュールは以下の通りである。

〈前期＝卒業研究⑴〉

1～3回。基本的なオリエンテーション。卒業研究とは何か，論文を書くとはどういうことか，1年間のスケジュールはどういう具合になるか。

4～6回。論文の書き方①。論文・レポートとエッセイ，感想文などとの違い。最終作品としてのレポートの体裁，分量，見出しの構成など。

7～9回。中間発表。現段階での構想を要旨，目次を中心にまとめて，ディベートルームで仲間といっしょに意見交換する。このころから図書館通い，データベースの活用，取材などの調査研究活動を本格化する。

10回～15回。論文の書き方②テーマを絞り込む。関連する調査研究の余地。著作権と引用の作法。日本語の横書き表記の様式（アルファベットや数字，カタカナ語の扱い）。

写真，表，図版の扱い方など。引き続き調査研究活動を行う。後期の前の休み期間（春休み，あるいは夏休み）こそ勝負の時であることの確認。

〈後期＝卒業研究⑵〉

1～6 回。卒業研究の骨格を決め，実際の執筆を行う。

7～9 回。中間発表とその討論。できればXpert，無理な場合はPP ファイルを添付したWord ファイルで研究発表を行い仲間と意見交換する。この時期に論文全体をカバーしたいちおうの草稿を完成する。

10～12 回。論文の補充・改定などを行いつつ，11 回に第一次完成稿を提出する。

13～14 回。執筆，推敲，細部の調整。13 回で最終的な完成稿を提出し，それに沿って具体的な指導を行う。

15 回。卒業研究レポート提出。

これまでの研究テーマ（概略）

〈2010 年度春学期生〉

アイフォンアプリと市場の関係性
携帯電話やインターネットと子どもたち
セカンドライフの栄枯盛衰
なかのバラまつりと地域活動
2010 年，電子書籍元年
ウィニーと情報教育
IT 社会の農業を糸島半島に見る

〈2011 年度春学期〉

ニコニコ動画研究
子どものケータイと親
フェイスブックとインターネット利用の変化
ツイッターとソーシャルネットワーク革命

指 導 法

指導の中心は，①録画コンテンツ視聴，②レポート提出と添削，③ディベートルームでの議論と指導，④スカイプ懇談，⑤補助教材の提供，⑥ほぼ完成稿の添削と郵送返却，である。順を追って簡単に説明しておこう。

〈１〉 録画コンテンツ視聴

オリエンテーション，論文の書き方などは，録画コンテンツを用意して，それを見るこ

とで理解を促す。

〈2〉 レポート提出と添削

中間発表をめぐるディベートが設定されている回以外は，毎回，長短さまざまなレポートを書く。質問も歓迎。原稿の草稿に関しては丁寧にチェック，指導する。

〈3〉 ディベートルーム

中間発表をめぐるディベートは，前期も後期もほぼ以下の要領による。

第８回：①自分のテーマのねらい，これから進める作業などを他のメンバーにきちんと説明する。早い時期にこの書き込みをする。②他人のテーマについて建設的な意見を述べる。

第９回：①第８回の仲間の意見について感想を述べたり反論したりしながら，それを受けて，さらに改善したプランを述べる。②仲間のテーマについてさらに積極的な意見を述べ，卒論の手助けをする。

このディベートルームとは別に，全期間を通して,「萬喋報」と名付けたディベートルームを開設し，折にふれての感想や教師に対する質問などを書いてもらっている。「萬喋報」は明治のジャーナリスト，黒岩涙香が発行した新聞「萬朝報」のもじりである（萬朝報には「よろず重宝」がかけてあったが，もちろん私の場合もそうである)。議論とお喋りとはちょっと違うが，気楽な議論という意味で，私はあらゆる講義・演習に「萬喋報」というディベートルームを作っている。

〈4〉 スカイプ懇談

半期に２度ほど，スカイプによる懇談を行っている。テーマの絞り込みなど，メールやレポートのやりとりだけではなかなかうまく指導できない場合に，スカイプによる懇談はきわめて有効である。

〈5〉 補助教材の提供

授業が平板になるのを防ぐために，折々に学習資料を配布して，正規の授業とは違う観点からの指導を行っている。その一つが「萬喋報・論文レポート」というシリーズで，①卒業研究ノートをつくる，②図書館に行く，③ CiNii（サイニイ）を引いてみる，を前期の最初のころに配布している。冒頭に紹介した「卒業研究の栞」もその一環である（きわめて初歩的な話なので，読む必要のない学生も多いと思う。だから補助教材である。参考までに，末尾に「萬喋報・論文レポート②」を添付しておいた)。

IT 社会の進展はまさに日進月歩で日々，新しい事件や事故が発生する。新商品の発表もあわただしい。これらの推移に関しては，私自身，雑誌や学会 ML でコラムを発表し，ブログにも再掲しているので，これらの原稿も適宜，学習資料として配布，研究の参考にしている。

〈6〉郵送による添削指導

卒業研究を一つの完成した作品に仕上げるのは難しい。全体の構成，文章の手直しばかりでなく，見出しの扱い方，図版や写真のほどよい大きさ，表の作成など，どうしても電子ファイルに朱を入れるだけでは意に尽くせないことが多い。

そこで一応の完成稿が完成した段階で，一度だけだが，ハードコピーに朱を入れて，それを直接郵送返却することにしている。

学生は何が苦手か

わずか２年の経験ではあるが，卒業研究指導で痛感したことをいくつか上げておく。

〈1〉まとまった文章を書くことになれていない

自分は何を書きたいのかがわからない学生もいる。書くことがないのに，書くことはできない。そういう学生には梅棹忠夫の「こざね法」を実践するように勧めている。自分の頭の中の引き出しをすべて開けて，そこに詰まっている自分でも気づいていない問題意識を掘り起こすわけである。

〈2〉テーマを絞るのが難しい

どうしても，叙述が総論的になる。「そもそもケータイとは」といった具合である。テーマの周りをいつまでもぐるぐる回っているだけで，中に踏み込むことができない。私は「森の中に分け入り，自分のテーマとする１本の木を探すように」指導している。「木を見て森を見ず」の逆だが，１本の木を丹念に見ることで森全体を見通す方法が，とくに短いレポートの場合，有効だと思う。

〈3〉日本語の表記，文章のスタイルに無頓着である

紙の本なら専門家が知恵を絞って作り上げた，立派な組み版がある。電子ファイルは融通無碍だから，どうしても文章の書き方も，日本語の表記も，全体の体裁もいい加減になってしまう。見た目にも美しいレポートが望ましい。万人が情報発信する時代の情報環境を美しいものにするのは，狭義の「サイバーリテラシー」である。

〈4〉図版，表，写真などの扱いが雑である

出来合いの表を使うことはできても，自分で表や年表などを創意工夫するのが苦手である。だらだらと文章にするよりも，１枚の図，１つの表がいかに雄弁かということを理解させたい。

Ｅラーニングのメリット

さまざまな事情でリアルな大学に通えない学生たちに，パソコン（モバイル端末）と通信環境さえあれば，世界のどこからでも，いつでも学べる機会を提供していることこそがＥラーニング最大のメリットだが，冒頭に上げたＥラーニングの弱点を補う現実的なメリットもあると私は考えている。少なくとも以下の２点は指摘できるだろう。

〈1〉日々，少しずつ勉強していくしかない

Ｅラーニングで学ぶためには定期的にアクセスして，授業を聞き，レポートを書き，ディベートルームに参加しないといけない。これがシステムとして決まっており，出席もレポート点数も，ディベート発言回数も，そのすべてが数字で示され，記録される。

これは，たとえは悪いが，授業を受けても講義には一切出ず，最後にしっかりしたレポートを書けば卒業できるといったリアルな大学で，かつてよく見られた通学態度とはおよそ違う。もちろんリアルな大学でも最近はそういう傾向はなくなっているようだが，Ｅラーニングでは，システムがスケジュールをタイトにしてしまっている，というところに逆説的なメリットがあると言えるだろう。

どうしても日々，少しずつでも勉強していくしかない。まさに，学問の王道にかなっている，と言えないだろうか（^o^）。

〈2〉手を変え品を変えて指導できる

体面的指導こそほとんどない（そういう指導をしている人もいると思う）が，スカイプによる懇談，メールによる相談，講義視聴，レポート提出と添削，学習資料による補充と，教師と学生のアクセス回路が多岐にわたることは，学ぼうという意欲のある学生にとっては，大いに学びがいのある大学と言えよう。

付録：レポート作成のための参考資料『萬喋報・論文レポート②』

萬喋報・論文レポートⅡ　図書館に行く

テーマは出そろいました。

そのテーマに関連するこれまでの研究業績にはどのようなものがあるでしょうか。あるいは，それに関連する最近の出来事，事件事故は？

これから登ろうとする山のあらましを最初に知ることが大切です。

どのくらいの高さなのか，急な坂なのか，おだやかなハイキングコースなのか，登り口はどこにあるのか，あるいはどの登り口が自分にあうのか，といった基本的なことがわからなければ，それこそとりつくしまもありませんね。

山の概略を知る一つの方法が図書館に行くことです。

〈本を積み上げる〉

残念ながらサイバー大学の図書館は蔵書が十分だとは言えません。皆さんの住む市町村にいい図書館があればそれもいいのですが，専門的な蔵書を多数そろえたところは，これも残念ながらあまりありません。

とりあえず都立図書館か県立図書館に出かけましょう。大きなバッグを持って。

ちょっと遠いかもしれませんが，休館日を避けて，まず朝から夜まで，まる一日を図書館で過ごす覚悟で出かけましょう。県立図書館ぐらいになれば，館内に食堂もあるはずです。

最初に図書館の入館手続き（会員登録）をします。用紙に所定の個人データを書き込むと，図書館カードを発行してくれます。入館手続きには何が必要なのかを，あらかじめ図書館に問い合わせておいたほうがいいでしょう。

手続きが終わったら，図書館の開架式書棚に向かいます。本は図書分類表にしたがって科学技術，コンピュータ，情報科学，情報理論，情報社会といったジャンルごとに並べられていますから，それを眺めます。いろんな本があることに驚くでしょう。膨大な書棚の前に実際に立って，驚くということが大切です。具体的な物が持つ迫力です。新たな意欲も沸くでしょう。古い紙やインクのにおい，どっしりした本の装丁などを味わうのも格別（^o^）です。

自分のテーマに関係する本を探すには，図書館端末を利用して，キーワード検索する方法もあります。キーワード検索では，誰かが借り出したり，現にいま閲覧したりしていて，書棚にはない本や地下？　倉庫の書庫に保存されているものも出てきます。ここがキーワード検索のいいところです。興味のある本はタイトル，著者，整理番号などをメモします。

開架式書棚で見つけた本は，そのまま閲覧室に持っていって読みます。検索でひっかかった本はカウンターで係りの人に書庫から出してもらいます。

こうして十数冊の本を閲覧室の机の上に積み上げます（許されれば，ですが）。

本の山を眺める

今度はあまり驚かずに（^o^），一冊一冊，読み始めます。読むと言っても，精読するのはまだ先です。

タイトルや著者，「はじめに」，「おわりに」，そして目次あたりを眺めながら，こういう人がこういう本を書いているのか，といった概略を知ります。なるほどねえ，と思ったら，思わなくても（^o^），次に進みます。

別の著者が同じ問題を別の観点から論じています。あるいは取り上げるケースが違います。よく似たことを言っている場合もあります。なるほど，こういう手もあるのか，と思ったら，次に進みます。

積み上げた本の半分も読み進める（眺める）うちに疲れるでしょうから，昼食をとりに食堂へ出かけましょう（^o^）。

１時間ほど休憩したら，また同じ作業を続けます。夕方帰るころには，自分が登ろうとしている山がどんな形をしているか，ぼんやりとわかってきます。これがこの日の成果です。見晴らしがよくなって，楽しい気分になるといいですね。

いくつか選んだ本で，これはきちんと読みたいと思ったものは貸し出し手続きをとります。大きなバッグを持ってきたのはそのためです（^o^）。

図書館によって冊数の制限がありますが，数冊は借り出せるはずです。これを自宅で精読します。

まだ読みたい本があれば，もう１日図書館に通えばいいでしょう。

図書館には新聞や雑誌もそろっています。テーマに関係する出来事（たとえば最近のファイル交換ソフトのウイルスを使った詐欺事件，仮想空間を利用したマルチ商法摘発）などは新聞の縮刷版を見るといいでしょう。

また事件をめぐる判決を知りたければ，『ジュリスト』，『法学セミナー』などの法学雑誌が参考になります。

雑誌コーナーに行けば，バックナンバーも見られますから，これもぱらぱらめくってみましょう。いい息抜きにもなりますよ（^o^）。

〈工夫と注意〉

図書館で本を読むための工夫をいくつか述べておきます。

①　これはと思った本は，「卒業研究ノート」にメモする

その辺の紙切れに書きつける，などというもったいないことをしてはいけません。紙切れはすぐなくしてしまいます。特定のノートを用意することが大切です。

②　付箋紙を用意する

ぱらぱらとページをめくっていて気になった箇所に付箋紙を貼り付けておくと，後から読み直すのに便利です。

③　引用は正確に

後に引用したいと思う箇所は，正確に書き取ります。コンピュータかコンピューターか，漢字を使っているのか，ひらがななのか，ですます調かである調か，漢数字か洋数字か，といった著者の流儀をきちんと記録することが大事です。最後にページ数も記録しておきます。ページ数をいい加減に書くと，後で確認しようとするのに手間がかかります。

④　参考文献

本には必ず，多くの参考文献が紹介されています。そこに興味を引く本が必ずあるはずですから，今度は，その参考文献を読みます。こうして勉強はどんどんはかどっていくわけですね。

⑤　基本的な注意

図書館の本はみんなのものです。大事に扱わなくてはいけません。ページに書き込

んだり，傍線を引いたりしないように。だからこそ付箋紙を利用するわけです。

借りた図書は必ず期限内に返すようにしましょう。忙しくて読めなかった場合は，いったん返してまた借りればいいでしょう。